新会長の挨拶

猪子　英俊

組織適合性学会会長：東海大学医学部，分子生命科学

このたび、霧島における第９回日本組織適合性学会総会において、十字猛夫先生の代理として、はからずも日本組織適合学会の会長に指名されました。未熟かつ若輩者である私には、このような大任は担うべくもありませんが、各理事、評議員をはじめとする皆様の御協力がえらるとのことで、引き受けさせていただきました。相沢幹先生、吉田孝人先生、片桐一先生の諸先輩が、この約１０年の間会長として地盤を築いてこられた本学会を、時代の風潮と流れに即して、ますます発展させることに努力する所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

２１世紀に向けて学会をとりまく課題として、次の３つがあるように思います。すなわち、「研究」、「タイピング技術の向上と普及」、「社会との接点」です。もちろん、ＨＬＡが将来も我々のキーワードであることは変わりません。まず、「研究」については、御存じのようにヒトゲノムの３０億塩基対の全塩基配列が解読されようとしてる現在、これからの医学、生物学は病気をはじめとするヒト表現型の遺伝要因を明らかにすることが、ポストゲノムシークエンシングプロジェクトとして、最も重要な課題です。いわゆる、ヒトの分子生物学がこのプロジェクトの進行によって、いままさに花開こうとしている、といっても過言ではありません。「ヒトゲノム多様性プロジェクト」と呼ばれるこのプロジェクトは、遺伝子多型を決定して、例えば病気などとの相関を明らかにすることにより、その遺伝子の機能の解明を目指すものであります。このような研究の方向性は、いままで我々が行ってきたＨＬＡ領域の多型解析による病気との相関や移植における適合性に関する研究とまさしく同じ方向性です。ただ、我々がＨＬＡ領域で行ってきたことを、対象をゲノムワイド（全体）に広げたに過ぎません。したがって、我々が長年の間、培ってきた遺伝子多型解析技術（ＤＮＡタイピング技術）や相関解析に関するノウハウは、必ずこれからの「ヒトゲノム多様性プロジェクト」に生かされるであろうし、我々こそがこの「ヒトゲノム多様性プロジェクト」の牽引者として活躍できると信じます。そのためには、ＨＬＡ領域のみならず、広くヒトゲノム全体の目を向ける必要があるでしょう。そうすれば、今話題となっているマイナー組織適合抗原の遺伝子も、我々の手で発見できるでしょう。その手始めとして、私がChairman を勤める2003年開催の第７回ＡＯＨ（Asia Oceania Histocompatibility Workshop and Conference：始めの予定では2002年９月に開催の予定でしたが、第13回 International Histocompatibility Workshop and Conference の開催が一年延びたため、2003年９月に延期されました）で取り組みたい、と考えています。すでに、この７ＡＯＨに向けて、徳永理事（７ＡＯＨ担当）、木村理事（７ＡＯＨ担当）、五條堀新理事（広報担当）は「ヒトゲノム多様性プロジェクト」として、それぞれの研究構想実現を目指して、努力されています。

「タイピング技術の向上と普及」については、すでにこれまで学会主催の４回のＱＣ（quality control）ワークショップが貢献してきました。今後はさらに発展させるために、タイピング技術の習得を目的とするウエットなワークショップや最新情報の紹介を目的とする教育的なワークショップの開催、ＱＣワークショップの充実化を実現させることにより、学会による認定制度の導入をめざしたい、と考えてい

ます。そのため、佐治理事（認定制度担当）、前田理事（標準化担当）、西村理事（教育担当）を中心に新たな取り組みを、近いうちに皆様にご提示できると思います。

「社会との接点」については、やはり一般社会はもちろん、学問の世界であってもＨＬＡに対する認識が薄いことが問題です。いつまでも、オタクの世界に浸っているより、明るいフットライトを浴びるに十分な価値ある貢献を社会にしている、と思います。学問的には、上記の「研究」で述べたようにヒト医学の中心になりえることも夢ではありません。また認定制度の普及によって、ＨＬＡの社会の認知に役立つでしょう。いま、伸び悩んでいる学会員の増加も見込めるでしょう。オーダーメイド治療の概念はＨＬＡ学から生まれたと思いますし、その実現はやはり我々ＨＬＡの分野から出したいものです。そのためには、我々ひとりひとりの毎日の地道な努力が必要です（最も即物的には、独りでも多くの新学会員を誘ってください）。血液型といえば、赤血球型ではなく、白血球型である時代に早くしたいものです。これら３つの課題、「研究」、「タイピング技術の向上と普及」、「社会との接点」はもちろん独立したものではなく、互いの相互作用によってのみ目標が達せられうるものであり、いうまでもなく全組織適合性学会員が取り組むべき問題だと思います。

最後にお願いですが、私は編集理事として学会誌「ＭＨＣ」の編集も担当していますが、原著論文の「ＭＨＣ」への投稿を是非お願いします。また、第７回ＡＯＨ（Asia Oceania Histocompatibility and Workshop）（Chairman：猪子英俊、Vice Chiarman：徳永勝士、木村彰方）を第１１回日本組織適合性学会との共催で、２００３年９月１６日（火）～１９日（金）、軽井沢プリンスホテルで開催します。主題テーマは、「ＭＨＣにおけるゲノム多様性」を予定しています。みなさまの御参加をお待ちしています。

以上、お願いばかりで大変申し訳ありませんでしたが、これは政治家の選挙の公約ではありません。日本組織適合性学会の新しい発展のために、皆様とともに努力して実現していこうとする目標です。力をあわせて、頑張ろうではありませんか。